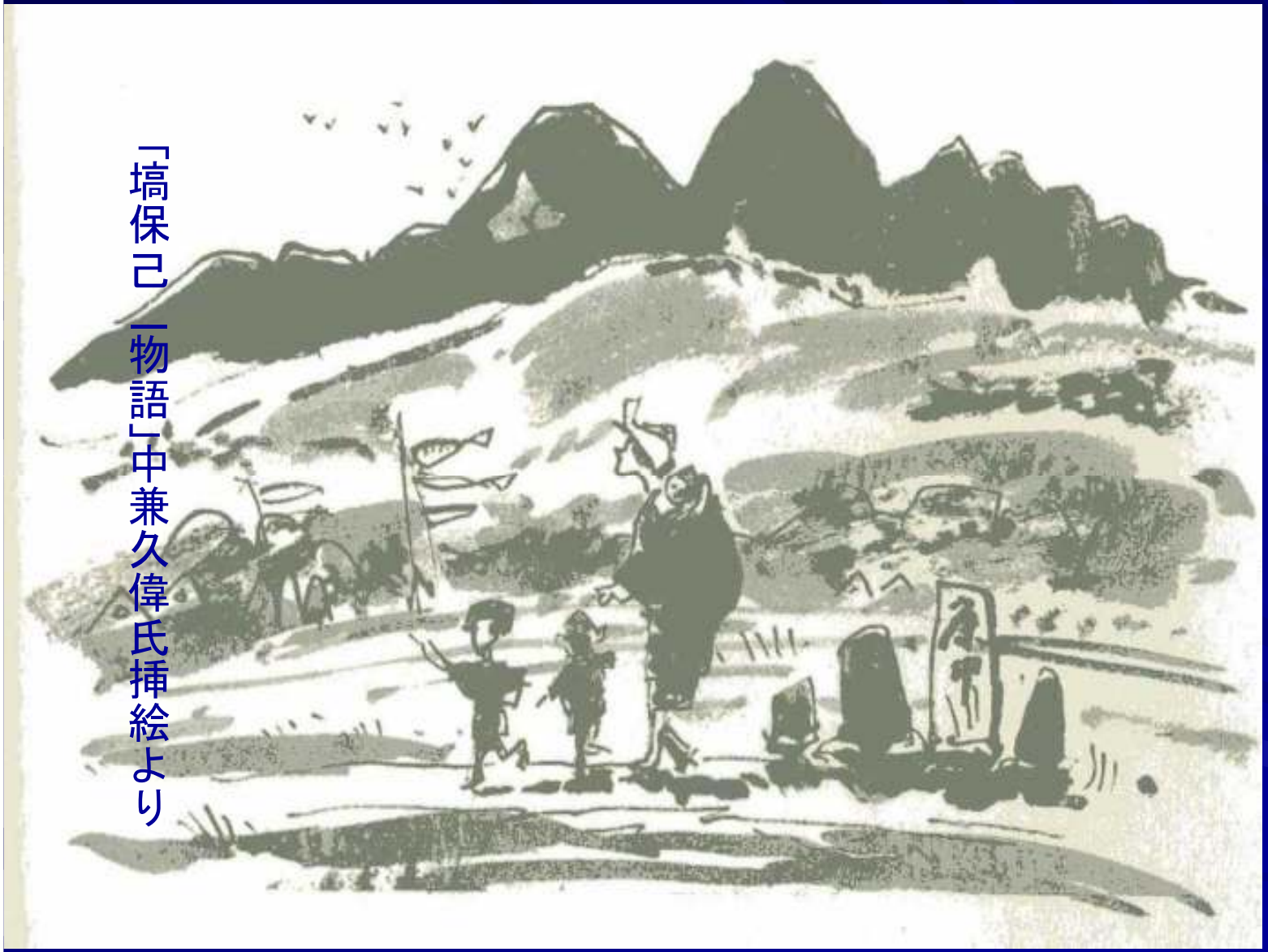
延享三年（一七四六）

保木野村に生まれる



「塙保己一物語」中兼久偉氏挿絵より

史蹟
塙保己一
2000
人物
第1位
塙保己一

七歳・失明

宝暦二年（一七五二）の春

肝の病（はしか？）で失明。

桐渕という藤岡（現藤岡市）の眼医者

寅之助　から　辰之助　と改名

多聞房　池田村修験正覚房に入門

・失明の原因

「はしかに伴い高熱を発すると、子供は食欲不を起こし、栄養補給ができなくなる。するとビタミンＡの欠乏から体力の衰えた時期に枯草菌という細菌が目に取りつき、角膜軟化症を起こす。この角膜軟化症がさらに進みますと角膜が溶けだすのだそうであります。こうなってしまうと治療が非常に難しいのだそうです」

東大病院眼科主任三島教授の推測

（長谷章久「塙保己一と自然」）

十二歳・母親の死去

宝暦七年（一七五七）

■母　きよ死去

・荻野姓

小野篁が祖先、篁の七代孫孝泰が武蔵守、その子義孝（義隆とも）が多摩郡横山へ、その子義兼、その孫季兼が相模へ、その孫季時（季重、俊重とも）が愛甲郡荻野に住んで荻野氏の祖となる。

・齋藤姓

母きよ　加美郡藤木戸村齋藤理左衛門の娘、「孝義録」（寛政十二年保己一が校正）の利兵衛は母の弟

松平大和守領分
加美郡藤木戸村
名主齋藤利兵衛　六八歳
天明八年（一七七八）褒美

（中山信名「温故堂塙先生伝」）

当時の農家の実態

大多数の盲人たちは、家族や村落の共同体的な扶養の中になかば支えられながら、補助的な農業労働力として吸収されていた

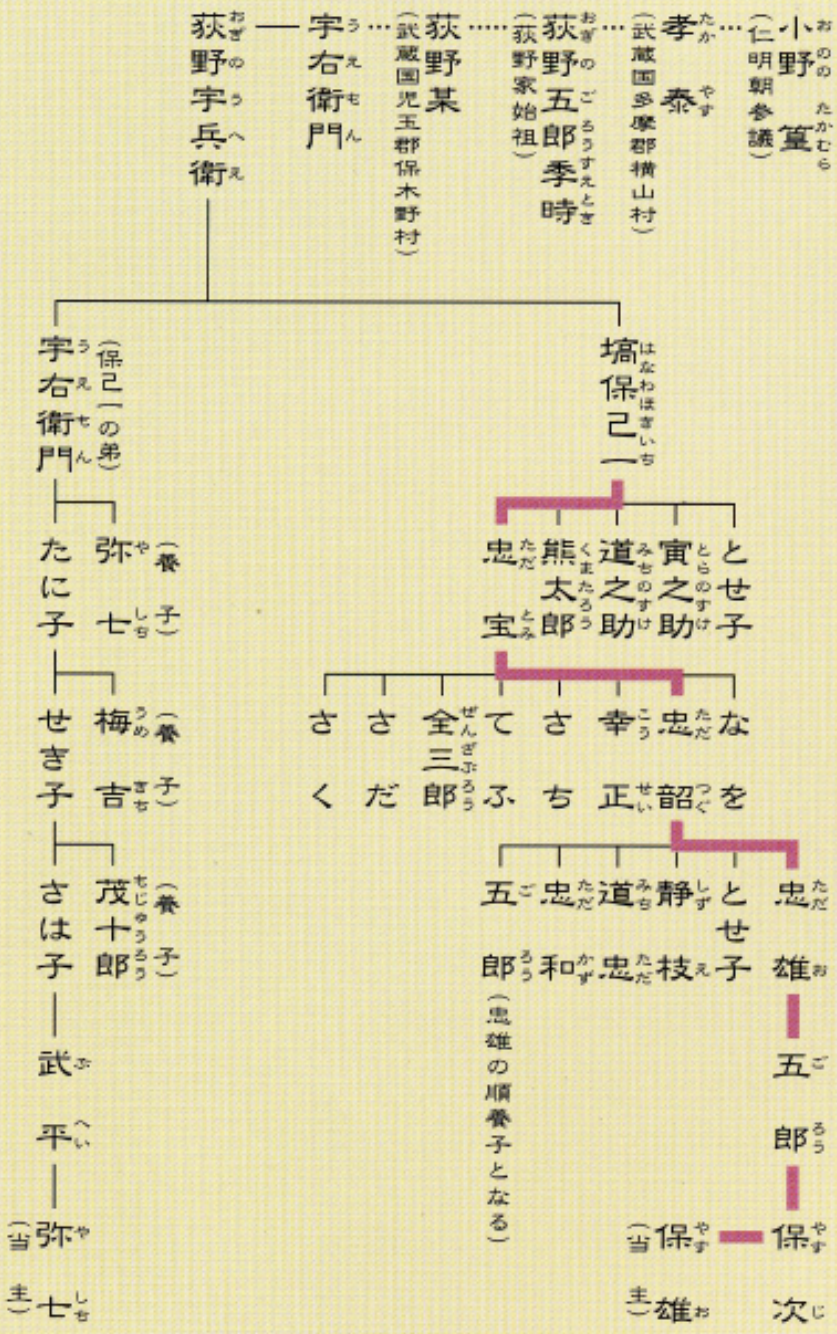
この「厄介」といわれた人々の地位を変動させる二つの要因があります。

その一つは農民家族の扶養能力であり、（商品経済の浸透にともなうこうした農民の階層分解や、経営規模の零細化）

もう一つは農業以外の非農業的な職業の可能性いかんであります。それは呪術的宗教と芸能、それに鍼・按摩の医業であります

（「近世の盲人と塙検校」加藤康昭）

荻野氏・塙氏系図（抄）


小野篁
（仁明朝参議）
孝泰
（武蔵国多摩郡横山村）
荻野五郎季時
（荻野家始祖）
荻野某
（武蔵国児玉郡保木野村）
宇右衛門
荻野宇兵衛
塙保己一
とせ子
寅之助
道之助
熊太郎
忠宝
なを
忠韶
幸正
さち
てふ
全三郎
さだ
さく
宇右衛門
（保己一の弟）
弥七
（養子）
たに子
梅吉
（養子）
せき子
茂十郎
（養子）
さは子
武平
弥七
（当主）
忠雄
五郎
保次
保雄
（当主）
とせ子
静枝
道忠
忠和
五郎
（忠雄の順養子となる）

十五歳・江戸へ

長沼依山著「塙保己一伝」より

御宝箱

銭二十三文の入った巾着

そば　一杯十六文

当時の農家の実態

大多数の盲人たちは、家族や村落の共同体的な扶養の中になかば支えられながら、補助的な農業労働力として吸収されていた

この「厄介」といわれた人々の地位を変動させる二つの要因があります。

その一つは農民家族の扶養能力であり、（商品経済の浸透にともなうこうした農民の階層分解や、経営規模の零細化）

もう一つは農業以外の非農業的な職業の可能性いかんであります。それは呪術的宗教と芸能、それに鍼・按摩の医業であります

（「近世の盲人と塙検校」加藤康昭）

絹商人・根岸肥前守について

十三といふとしの春　宝暦十年庚辰三月）父に請て絹商

此絹商は江戸へ出て、与力の株を買て、後遂に町奉行まで昇進りて、根岸肥前守といひし人也、さて此連れ立て江戸までくる途中にて、大人と互に名の挙げくらべ せんと約されしとぞ）

と共に東都に至り雨富検校須賀一が門人となり、彼家に寄宿し名を千弥と改り。

（中山信名「温故堂塙先生伝」）

←

忠韶写本」の影写本では明らかに欄外への書き加えである。斉藤氏も、その筆跡を　校訂者栗田の筆跡でも、忠韶のひっせきでもない。」

『温故堂塙先生伝』の中にはこの時の絹商人は江戸への途次、辰之助との話の中で「二人でこれから出世競争をしようではないか」と語りかけたと言い、果せるかなこの人が後に幕府の経済官僚として勘定奉行に進み、次いで町奉行に任ぜられた根岸肥前守鎮衛(やすもり)であったという一節がある。しかし、このことはいまでは異説と考えるのが一般的であるようである。

根岸家

衛尚(もりなお)

文昭院殿(六代将軍家宣)に仕えたてまつり

宝永元年(一七〇四)御供の列にありて御家人に

正徳元年　五十俵を加へられ、

正徳四年　二十俵を加増あり、旧禄を合せて百五十俵

衛忠(もりただ)

享保六年(一七二一)に勘定に列し、

寛保三年　代官に転出

衛規(もりのり)

宝暦五年(一七五五)九月に九代将軍家重に拝謁

宝暦八年　三月にわずか三十歳で死去した。

鎮衛(やすもり)

安生定洪(あんじょうさだひろ)の三男

宝暦八年(一七五八)二二歳のとき根岸衛規(もりのり)の養子。

根岸肥前守鎮衛(やすもり)宝暦十年ころはすでに武士身分である。

(塙記念館所蔵文書　　児玉町史編纂委員会)

旗本永島氏との関係

保木野村は青柳郷と唱ふ、庄名前村に同じ（若泉庄）江戸よりの行程二十二里、民戸五十余、東は八幡山町・上真下村、南は田端村、西は新里村、北は賀美郡八日市村なり、東西八丁程南北五丁許、用水は九郷用水の組合なり、

当村にては伝へざれども永禄の頃は、用土新左衛門が知行たりしこと、榛沢郡用土村に出せる北条氏康・氏政等の文書に見えたり、寛永の頃は南條金左衛門が御代官所なりしが、其後永嶋百助に賜ひ今子孫長兵衛に及べり

（新編武蔵風土記稿）

保木野村を知行した旗本

永嶋氏

嘉林（よしもと）（刑部左衛門）

嘉高（よしたか）（百助）

墨林（すみもと）（次郎太郎）

恭林（ゆきもと）「宝暦六年九月二十日家を継ぐ」

恭當（ゆきまさ）

（『寛政重修諸家譜』）

保己一が江戸へ出た宝暦八年？（一七五八）から十年ころ、永嶋家の当主は恭林（ゆきもと）であった。

保己一とどう関わったか不明。